

稱讃 二八四号

二〇二六年八月一日発行



この度の熊本地震にて
被災されました皆さまに
衷心よりお見舞い申しあげます。



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺
〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

メール shousanji@festa.ocn.ne.jp

去る七月二十八日、震度七の熊本地震が発生いたしました。十年前にも大きな地震が熊本を襲い、その後、令和二年にも豪雨による大きな災害がありました。

お亡くなりになられた方、被災され怪我された方、避難生活を送っておられる皆さまへ衷心よりお見舞い申しあげます。

知人からは、ラインで「出来ることから」と呼びかけられております。私の現状としては、熊本の親戚の状況が気になっており、本堂・家屋の損傷はあったものの怪我は無かったことを聞きつけ、ホッとしたことです。が、「出来ることから」と言われながら何も出来ないでいます。

八月は、六日は、広島「原爆の日」、九日は、長崎「原爆の日」、十五日は、「終戦記念日」です。十二日は、「御巢鷹山航空事故」もありました。あわせて、八月は海難事故や洪水被害も多く、熱中症等でお亡くなりになる方も多いことでもあります。

「いのち」について、人為的にも自然的にも考えさせられる出来事が蘇って参ります。「蘇る」なんて当事者にとっては、心身の震えるほどの思いなのかもしれません。

「称仏六字」といふは、
なむあみだぶつ ろくじ

南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。

「即嘆仏」といふは、すなはち
なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになり。

また「即懺悔」といふは、
なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふるは、すなはち無始よりこのかたの罪業を懺悔する

になると申すなり。

「即発願回向」といふは、
なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふるは、すなはち安樂浄土に往生せんとおもふに

なるなり、また一切衆生にこの功德をあたふるになり。

「一切善根莊嚴浄土」といふは、
あみださんじ いっさいぜんこん

阿弥陀の三字に一切善根をさめ

たまへるゆゑに、名号をとなふるは

すなはち浄土を莊嚴するになるとしるべしとなり。

『尊号真像銘文』より

2026（令和8）年度 稱讃寺門信徒会費 年会費 6,000円

①城北信用金庫一ツ家支店

名 義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村信也

口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行 店名四四八

名 義 キタムラ シンヤ

口座番号 普通 2374851

今年の旧暦七月十五日は、八月二十七日になります。旧暦の七月十五日は、『仏説孟蘭盆經』によると、雨季が上がる日であり、僧侶方が、晴れた日に外に出て、雨季の期間、洪水等で奪われた命、また奪った命に対して、懺悔する日(僧自咨の日)だと説かれております。

「懺悔」と言うことが、お盆の起源、意義とも言えるかと思えます。

仏教語には「慚愧(ざんき)」という言葉もあります。

「慚愧」とは、自分の良心に恥じることを「慚」、世間に恥じることを「愧」と言い、悪を自覚する精神状態を指します。

「懺悔(さんげ)」とは、犯した罪を仏前で告白し、リセットする「具体的な儀礼」を指します。仏教では罪を浄めて再出発するための前向きな修行行為です。

「慚愧」は自分の心(内省)であり、「懺悔」はその意識を行動に表すことだと思います。

昔から「懺法(せんぼう)」「悔過法(けかほう)」というものがあるようです。種類として、

①法華懺法 法華經を読み、日頃の悪い行いや煩惱を悔い改める最も盛んな法要。

②観音懺法 観世音菩薩の大きな慈悲に頼り、自分の罪やけがれを清めてもらう儀式。

③阿弥陀懺法 阿弥陀仏を讃え、極楽浄土へ行けるよう願いながら行う懺悔の法会。

④の阿弥陀懺法は、阿弥陀仏と諸仏を招いてこれまでの罪を悔い改め、極楽浄土への往生を願う浄土宗の特殊な法要だそうです。おつ

とめの方法は、「漢音」読みです。私たち浄土真宗本願寺派でも『阿弥陀經作法』という作法があり、「阿弥陀仏(アビダブ)」と漢音読みします。ご本山での「正忌報恩講のお晨朝では『漢音小經』(漢音読みの阿弥陀經)を読みます。

金子大樂師は、『往生と成仏』の中で、

私は阿弥陀經は人間生活の懺悔を表わしたものだと感じて、その時分の若い読者から大変喜んでもらったことがあります。今でもその人を忘れません。

昔日本は懺法、悔過法というものがあつて、それに阿弥陀經を読まれたということは、何か意味の深いことだと思います。浄土の安樂を説くことは、実は安樂そのものよりもむしろ浄土の安樂を介して、人間生活の浅ましさを懺悔する。そこに自ら浄土が観じられるのであるということにおいて後の世のためという、その後生が特殊の意味をもっているのだと思われるのであります。

だから阿弥陀經は十方諸仏の称讃であつて、十方諸仏が念仏往生の道を称讃されるのであります。その諸仏称讃の經典が、人間世界の懺悔を教えているのであります。その言葉を聞けば、浄土の徳をほめて

いるのですが、その響きを感じれば、そこに人間生活の懺悔があるのであります。それが「称仏六字、即ち歎仏即ち懺悔」(尊号真像銘文)といわれたものであります。

と味わっておられます。

真言宗の金剛界五悔(こんごうかいごげ)では、①「至心帰命」(心から仏・法・僧の三宝を信じ、身を委ねること)②「至心懺悔」(過去に犯した全ての罪や過ちを心から告白し、悔い改めること)③「至心随喜」(他の人が行った善行や功徳を、自分のことのように心から喜ぶこと)④「至心勧請」(仏に対して、この世に留まつて教えを説き続けてほしいと願い求めること)⑤「至心回向」(自分が積んだ功徳を自分だけのものにせず、すべての生きとし生けるもの(衆生)に分け与えて共に成仏を願うこと)とあります。

このことは、先の「慚愧」「懺悔」も含めて、聖道門の聖者・賢者の自力の修行行為が出来る方のことでありましょう。

私たち凡夫は、感情で物事を捉えてしまいます。今、亡くなった人を思うに、この世の感情をもつて亡くなった方を思つてしまいます。

金子師は「親鸞は父母の孝養のために一遍にても念仏申したることいまだそうらはず」との

心を感じれば、見送るものの心をもつて、見送られるものの心を推し量つてはならないということであり、亡くなる方はかわいそう、迷つて

いるとの感情が転換して、亡くなった方を仏さまと拝み、この世に残された私こそいつまでたつても迷いの世界を離れられないなあとか知らされるとも仰つておられます。

ここに、本願他力による「慚愧」「懺悔」があるのでしよう。お盆を迎えるにあたり、阿弥陀さまの大きなお慈悲を訪ねてみましょう。

特集 金子大榮師のご領解

『親鸞の人生観』

教行信証眞仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

二三 分限の生活

本文 律宗の用欽のいはく、いたれること、華嚴の極唱、法華の妙談にしかんや。かつはいまだ普授あることをみず。衆生一生にみな阿耨多羅三藐三菩提の記をうることは、まことにいふところの不可思議功德の利なり。已上

口語訳 律宗の用欽師はいう。至極の妙談は『華嚴』『法華』に及ぶものはない。しかも、その經に普く凡夫がこの一生に無上正眞の道を成就するということは説かれてない。されば念仏こそは誠に不可思議の功德といわねばならぬ。

一 律宗の用欽は元照の弟子である。『阿弥陀經』を解釈して『超玄記』を著わした。その『阿弥陀經』には仏名・經名を聞き浄土に生れようと願うものは、みな仏道を退転しないと説いてある。そのようなことは大乘仏教を代表する『華嚴經』にも『法華經』にも説かれていない。

しかれば念仏往生こそ、まことに不可思議の功德といわねばならない。―それが用欽の領解であつた。

ここではまずもって『華嚴』と『法華』とが『阿弥陀經』と対照せられていることに留意すべきであろう。『華嚴經』は釈尊成道の内景をそのままに説きあらわされたものであり、『法華經』は仏陀の教化の終歸における満足を明かせるものである。したがって仏教の大乘精神はこの二經に尽くされているといつてよい。だからこの二經によれば、いかなる衆生も成仏のできないものはないのである。しかるにその道理は充分に説かれていながら、その実際があきらかにされてない。しかし、その実際はかえつてこの『阿弥陀經』に説かれているのである。

つぎに心ひかれることは、それが律宗の高僧の説であることである。その『超玄記』はいまはつたわつていないが、親鸞は披見せられたのであろう。その師、元照のことばとともに『行文類』にも『超玄記』が引用されている。師弟ともに律宗でありながら深く浄土教に帰依せられた。そこにわれらは、戒律というも念仏のころにおいて行われるものであることをおもひしらめられる。

持戒坐禪名正法 念仏成仏是真宗
いましめまもり、心しずめよ
み名にてきとる、これ眞宗ぞ
しかしとくにここに用欽のこのことばが引用されたのは何故であらうか。それはおそらく

王曰休が『法華經』によりて念仏者は弥勒におなじと説けるものとおもいあわされるものがあるからであらう。王曰休の説くところを推究すれば、浄土の經説は『法華の妙談』に勝るということになるのである。したがって、用欽の領解も念仏者は弥勒とおなじことを証明するものである。

二

こうして用欽は浄土の教えは『華嚴』『法華』にまさることをあきらかにした。これによりてわたくしはかえつて浄土の教えこそ『華嚴』『法華』の精神を全現せるものであることを考えてみたい。それは『華嚴』も『法華』も大乘教は出家と在家との別ないことをあきらかにしようとしているものであるが、その精神はただ念仏のころにおいてのみ身証されるということである。

『法華經』は万善同歸と説くものである。古來この經によりて資生産業皆遵仏道と領解してきた。この經の精神が解れば、日常生活そのままが仏法となるということである。「譬喩品」における長者火宅の喩、「信解品」における長者窮子の喩をみれば、人間にありては、大小凡聖の別はあつても仏智にありては一味平等にみられていることがしられる。「地涌品」の説くところによれば、大地に親しんで生活する群生の仏性においてこそ、かえつて眞に如来の寿命が感ぜられるのであらう。そこに『法華の妙談』があるのである。

「華嚴の極唱」にいたりて廣大無辺で凡智の測りうるものではない。されどその実際は善財童子の求道物語において観察することができ。童子の値遇した五十三人の善知識というものには在家の信者が多い。それぞれの身分と職業とにおいて普賢の徳を成就せるものである。その普賢とは生活のいかなる状態をも経験して知悉しているということである。だから煩惱を厭うていては普賢であることができない。しかれば普賢行というも「煩惱を断ぜずして涅槃をう」ることの他ないのであろう。その善知識の身証するところもまた廣大無辺で測り知れないものである。されど心して経意をうかがえば、すべての手近にあるものである。したがって、手近に感ぜられてゐるものこそ廣大無辺の徳あるものといわねばならない。道は近きにありて徳は高遠である。そのことを説きあかそうとするものが『華嚴經』である。

三

ここであつたくしは「分限の生活」ということを考えてみたい。人のおの身分があり職分がある。男女老少等は身分であり、農商勞使等は職分である。したがってその分に限定された生活があるのである。その分限の生活を為すことが普賢の行となるのである。それは世のため人のためといつても、自分の分限を尽くすことの他ないということである。

仏道とは自利・利他を満足するものといわれている。それはあたかも自利と利他を区別す

るものようである。されど人間の行為には、本来自利と利他とを分かつことのできないものがある。人は何を為すかということは、たしかに自身の欲するところ、好むところであるにちがいはない。そのかぎり、それぞれの業務を樂しんでいるのである。しかればそれはまったく自利の行というものであろう。されどそれはかならずそのままに世のため人のためになつてゐるのである。その意味においてそれは利他行となれば、その人は自利の慶びを失うこととなるであらう。自己の職分に満足を感じしめてゐるものは、それが利他の徳をもっているからである。

これを翻せばそれ自体が利他行とのみ見える行為も自利行に他ならぬということである。そのことは政治・教育等を任務とする指導者たちにとくに反省せられてよいことであらう。独り者は親切であるという事実がある。その親切において生き甲斐を感じずるからであらう。その生き甲斐を感じずるということこそ自利というものではないであらうか。しかれば政治・教育のようにまったく利他行とのみ見える行為も、それを自身の道と感じてゐるかぎり自利行といわねばならない。いかなる人物といえども、生の喜びを感じることのできぬ行為し得ないのである。

しかるにわれらは自利行と利他行を区別しようとしている。されどそれは行務の性格を異

にするものであつて本質によるものではない。もしそれが本質的に異なるとするならば、それは我執といわねばならぬのであろう。自利は我執によりて利己心となり、利他は我執によりて功名心となる。ともにその分限をわすれているものである。したがってその生活は身についていない。その人は真に幸福を感じることではないであらう。「分を尽くして用を立つ」そこに人間生活の有難さがある。それは分を尽くすところに自利あり、用を立つところに利他があるからである。真仏弟子の普賢行というも、それより他にはないのである。

四

われらの行為はつねに自主的であらねばならない。しかし自主的であるということとは、わが意のままということではないであらう。「随处に主となる」ということは、そのときそのときの情勢に従つて善処することである。その従うべき道を知らないものは、自主性なきものといわねばならない。しかれば分限の生活は、自分・職業等において定まるだけではなく、自身のおかれてゐる位置、宿命的な性格等によりて、おのずから定まるものであろう。老少男女に分限の生活あり、教えるものと学ぶものに行爲の分限があることは望ましいことである。富める者の道徳と病める者との道徳とは、その分を異にすることにより互いに用を立つのではないであらうか。人權は平等であるといつても、人各々の義務あるところにおいて成立する

ものであらねばならない。

ここに考えさせられることは、権利・義務という思想である。それは善き法律であつても善き道徳であるとは思われない。老少善悪の人をえらばず、その存在を認容するものは、ただ大慈大悲の仏心である。しかしその仏心を信ずるものは、その感激において、かえつて自身の存在を主張しない。しかるに権利による平等は自身の存在を主張する。そこにはつねに存在を保証し得ない不安があるのではないであらうか。

義務とはしたしめることばである。それは分限の生活とも思い合はされるからである。また道にしたがつている。そこに自主性が感じられるからである。それにもかかわらず権利ということばと結びつくときになにか強制的なものになるのは何故であらうか。そこに自主性が失われ、したがうことの喜びが見出せないからである。人間の順真なる生活は法律以前にあらねばならない。その順真なる生活をあらわす善いことばがないのであらうか。

われらは分限の生活の有難さを忘れてはならない。本願を信じ念仏ももうす喜びも、この分限の生活の場を与えられるからである。それによりて権利義務の思想も、いたずらに自己主張とならずに、柔軟心をもって受行することとなるであらう。そこに生活に即する宗教あり、また自然の道徳というものがあるのである。

五

『華嚴經』に説く善財童子の善知識には、僧侶あり、信者あり、女性あり、長者あり、医師あり、船人あり、仙人あり、外道あり、童子あり、童女もあるのである。それは道を求むる心せられていくのである。

さえ真実ならば、善知識は到るところに見出されるということの説くものであらう。しかるにその善知識たちはおのおのその行知し身証せることを語るのみであつて、道理を説き、教法をのべるといふことはない。善財童子は、それらの善知識の門に入り、その身を見、その室を見、その家を見、その為すところを見て感化をうけているのである。しかしてその受けし感化はつねに全仏道である。女性も長者も乃至童男・童女も、それぞれの行為と生活において、すべての仏に仕え、すべての衆生を救い、すべての国土を浄めているのである。したがつて善財童子の求道心は五十三人を待たず、いずれの一人にても十分に満足されているはずである。

しかるに善財童子は、厭(あ)くことなく善知識を求めていくのである。またどの善知識も、自分は全仏道を身証していると説いているものがない。わが知るところは、これだけである。

さらに深さを究めようとするならば誰々を訪(とぶら)へと次の善知識を指名するのである。ここにこそ分限の生活というものの意味があるのであらう。何人の生活も特殊のものであることにおいて分限あるものといわねばならぬ。したがつて何人も全知であり、全能であることのできないはいうまでもないことである。自分の役割や立場(分)をしっかりと果たし、社会や人の役に立つ(用に立つ)という意味の言葉です。一人ひとりが自分の持ち場でベストを尽くす大切さを表している。

※「分を尽くして用に立つ」

「分」ということで、親鸞聖人は『教行信証』化巻に「しかれば穢悪・濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。今の時の道俗、おのれが分を思量せよ。」と仰つておられる。個々の能力のことではなく、罪惡深重煩惱熾盛でありながら、外教に惑い営む自分自身のことのできないのはいうまでもないことだと思ひます。

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長―スピリチュアルケア―」
 仏教文化研究所主催シンポジウム 二〇〇九年七月十四日

仏教文化研究所主催シンポジウム

成長 — スピリチュアルケア —

シンポジスト

渡辺 孝子

飛驒千光寺住職

大下
大圓

龍谷大学教授

鍋島直樹

武蔵野大学教授

種村健二朗

●大下大圓氏（飛騨千光寺住職）

「がんばるのも悪くない」縁生の力

大下 ただ今、種村先生の方からご紹介いただき
ました、大下大圓といいます。今朝高山から出てき
ました。今は非常に、交通網が良くなりまして、お
昼にはここへ着けました。高山というと遠いところだ
なと思うかもしれませんが、半日で来られます
ので皆さんどうぞ遊びに来ていただきたいと思ひ
ます。

私は千光寺の住職をしておりますけれども、あちこちの大学や、あるいは臨床現場へ行きます。そんなところを少しお話したいと思ってます。

(写真を映写して)うちの寺の真正面に御嶽山があります。山が開かれた千六百年前から変わらないう風景です。千光寺に来るとこういう風景が見られますので是非来ていただきたいと思っています。大自然というものが日本人の心情としてのスピリチュア

ルな部分にとても重要な影響を及ぼすのではないかと私は思っています。自分の家の庭を造るという営みには、西洋のガーデンングとは違った、庭に哲学というか人生というか、そういうものを集約しようとする日本人の生き方というものがあると思います。

これは先ほどご紹介したように円空さんの彫つた、両面宿儺(リョウウメンスクナ)と言ひまして、日本書紀に出てくる人物です。日本書紀に出てくるということは、非常に古い時代の人間なのですから、最後は大和朝廷によつて滅ぼされるといふ悲運な人なのです。いわゆる抹殺された地方文化なのです。だから日本というと、系統だつて見えなうるかもしれないけれど、実は様々な地方の文化があるのだということを、こういう人たちから私たちが

は学ばせてもらっています。ですから仏教とか、神道以前の、日本人の文化が根付いているところはまだ日本にはあちこちにありますが、そういったものの影響を受けて私たちは生きているのじゃないかなと思っています。そういう意味で文化の上に神道が生まれ、仏教が育ち、儒教も道教も入ってきて、長い年月に日本人は様々な宗教観を同時に共存させながら生きてきた社会であります。千二百年近くにわたって、仏教と神道というのは実は仲良くしてきたと思います。皆さんの中でもお祭りなんかに参加された方も多いと思いますけれど、そういう意味では、仏教というのは非常に特異な宗教です。キリスト教やイスラムは、前の宗教を全部否定すると言いましょか、全部根絶やしにして、新しい宗教観を植えつけるのに対して、仏教というのはその前にあつた宗教を否定しないで、そこに融合する形をとっている。そういう意味では、共生、共に生きるということのスタンスを持ってい

たのではないかなと思っています。

中世にはキリスト教も入ってくるし、新興宗教も入ってきます。先ほど種村先生がおっしゃったように、明治以降に近代の科学的な志向というのが、ヨーロッパを中心として、戦後はアメリカを中心として入って来しました。だから日本人の今の考え方の中には、そういう、本来あるような考え方と、新しい、近代の考え方というものがごっちゃになっていて、それはまさに教育の影響なんだと思いますけれど、どちらを選ぶかじゃなくて、両方いろんなところに入り込んでいるのではないかなと思うんですね。そういう意味ではこれから、もう一度そういったことを見直した上で、東とか西というように分けるのではなくて、未来に向かって統合していく時代に来ているのではないかなと思います。

そういう意味で私は、医療現場へ行きながら、なんとかそういったことを統合していくことができるような、スピリチュアルケアが出来ないかなというようなことを考えています。で、これは愛媛教育大学の中村雅彦さんが「スピリチュアリティというのは、多義的な概念」なのだというふうに言っておられます。しかもそのスピリチュアリティのコアには宗教性があるということで、「いたずらに宗教色を排除してしまうのではなくて、古代から人類に脈々と受け継がれてきた英知、我々の深層心理に低在する、原初的衝動とか感性の気づき、こういったものを再認識する」という取り組みが、実はこれからの時代には必要になってきているのではないかなと思います。ですからスピリチュアリティというのは宗教的な現象で、宗教抜きにしてスピリチュアリティは語れないのだというふうに思っています。それぞれが持っている宗教、仏教というものに根ざした、そこに、様々な宗教体験をしながら実は育

ていくスピリチュアリティというものを、もう一度大事にしたいと私は思っているわけです。

飛騨高山で、私たちは二十五年前から、いろんな勉強会をしてきまして、それが様々な活動に展開されてきました。私もそういう中で実際に始めはボランティアとしてこの活動を開始しています。ホスピスの全国大会をやったりしながら、日本人の生き方とか死に方というような問題について考えるシンポジウムもやってきました。先ほども触れましたけど、今の日本人というのは大きく、この二元論と一元論というのをごっちゃにしているのではないかなと思うのです。まあ、これについては、これだけで一時間も二時間もしゃべっていかねければならないほどの深い意味を持っているわけですけども、要は、近代の医学というのは、最先端の医療の中で、いわば機械論的なモデル、人間の身体をモノとして扱ってくるような風潮の中で、そこにある精神性というものが疎かになってしまいう傾向が多かったんですね。でも本来、日本も含めたこのアジアの多くは、一元論的な命の大きな流れの中で、様々な価値観を持って、それが共存して、生きていくというような考え方があります。これも、ほんとに詳しく説明しなければいけないわけですけども、この二元論と一元論という考え方があるというところだけを今日は皆さんの頭の中にちよつと残していただきたいと思います。ですからこういうことも含めて、日本人のこれからの生き方とか、ケアというものも、いろいろと考えていく時代に生きているのではないかなと思います。

床スピリチュアルケアというものを、これはボランティアではなくてスタッフとして患者さんや家族と関わりを持って行っています。また、和歌山県立医科大学では、付属病院の緩和ケア病棟で、スピリチュアルケアのスーパービジョンを月に一回やっています。また、六月からは大阪市の医療センター（公的な機関です）でも、スピリチュアルな学習会を始めています。お寺では、約十年前から、そういうスピリチュアルな部分を体験的に学ぶ場として、スピリチュアルケアセミナーを開講してきています。そういうことから、NPO法人の日本スピリチュアルケアワーカー協会を立ち上げて、社会人のための、認定スピリチュアルケアワーカーの養成をやっています。さらには、昨年、日本スピリチュアルケア学会を立ち上げて、聖路加の日野原重明先生が、会長になっておられますけれども、そういう学会を通じて、日本人のスピリチュアルケアを理論的に構築していこうではないかということを、試みています。

少し具体的なお話をしていきたいと思いますけれども、高山市内のクリニックでは、先ほども言ったように、作務衣のまま臨床現場に行っています。この医院は一般のクリニックで、別に宗教立ではないわけですけども、院長から、「是非参加してほしい」と求められて、チームの一員となって活動しています。坊さんが来るわけですから、まだ亡くなつてないわけですけど、日本人にとっては初めはぎよつとするわけです。坊さんを見ると、今はもう十年も経っていますので、もう空気がないなものです。看護師さんの動線と私の動線は違います。看護師さんはてきぱきとベッドとベッドの間を動いていますけど、私は、椅子を持ってだらだらだらだらと、あちこち熊のように歩きながら、時々、腰を下ろして、その患者さんのお話を聞かせていただく。（映写）こういう写真を見ると、なんか私が説教に行っているのじゃないかと、思われる方もあるかもしれませんが、そうではなくて、一人の患者さんとどういう風にしてお話したいのかということとを坊さんの立場から提案をして、それをケアの中に反映させていたたいいます。ですからこういうふうにごくくばらんに談話室でお話をする。日常の話の中にも、実はその人の苦しみや様々な片鱗がぼつぼつと出てきますよね。それを見逃さないで、「じゃあそれももう少し詳しく教えてください」と言つて、ベッドサイドでそのお話を聞かせていただく。つまり患者さんの個別的な、非常に深い話を、聞かせていただくという活動をしています。ほんとに病気を伴う、まさに治療する上においての様々な苦痛というものが、そこに存在するわけですね。それはどういふことをするかというと、基本的にはカウンセリングの形態を用います。カウンセリングですとクライアント中心療法といまして、相手が自分で解答を出すために、長い時間をかけて関わっていくかなければなりません。しかし、普通のカウンセリングのような、「じゃ、来週ね、再来週ね」という約束は、ターミナルの患者さんの場合には通用しないのです。一週間後にはもう居ないというケースがあります。そうすると、今、出会ったその瞬間、まさにそこでその人自身が解答を見つけたらいいという想いが強い場合もあります。そうすると、私たちは、「一歩踏み込んだ傾聴」という言葉をよく使うのですけれども、その人にとって何が大事なのかということを中心に、その人の中に、土足で踏み込むようなことは極力しないでゆつくりと入っていくというようなアクティブリスニング

を試みています。さらには、いろんな方面の中ではインタビュートか、スピリチュアルな交流というのも試みています。仏教は昔から対機説法とか応機説法というような言葉をよく使ってきましたし、やはり相手の話をちゃんと聴くとか、それを一緒に考えていくために沈黙するというのも大切なケアだと思います。そしてそこから、逆に教えていただく、私たちが学ぶべき問題というのをもたくさんあるということですね。ですから一方的なものではなくて、お互いが学ばう関係がスピリチュアルな部分でもあります。

(映写) またこれは、在宅のALSの方です。ALSというのは、日本語の病名は筋萎縮性側索硬化症で、だんだんだんだん筋肉が萎縮していつて、最後は肺や心臓が止っていくのです。肺が止まるということは呼吸ができなくなるわけです。意識ははっきりしているわけですよ。呼吸器をつけるかということ、まず患者さんはその判断、選択を迫られるわけです。それは大変な苦しみを伴っているわけですよ。ですからそういうようなことに、どうしたらいいのだろうということ、患者さんからの要請があつて、その枕元でそのことの苦しみについて一緒に話し合うという場面もあります。

(映写) 一方これは、和歌山県立医科大学で毎月やっている、緩和ケア病棟での学習会の様子なのです。昨年まで高野山大学にも行っていた関係で学生をこへ連れて行って、実際に患者さんと会ってその患者さんから教えていたということ、実習風景です。文献やテキストではなく、実際に死に逝く患者さんから、学生が生の体験としてそこから学ばせていただくのです。ここで学生は大きく成長します。教科書がうそだというわけではないのですけど、この試みでは、第三者的なものではない、ほん

とに目の前の人の苦しみに関わっていくことになりまます。そういう意味では臨地実習というのは非常に重要なものを持っています。さらに、そういう中から、みんなで患者さんのことを勉強しようではないかということで、事例検討やスーパービジョンを、やっているわけです。

皆さんに配布したレジュメに書かしていただいた、患者さんのいくつかの症例を少し紹介すると、(映写) この方の場合もガンの末期で、この人自身が山に登りたいという希望を持ってみえまして一緒に山へ登っていくというようなことがあります。

ガンだけれども出来ること、がいくつかあります。先ほど、お話がありましたように、ガンだから何も出来ないのではなくて、ガンになったからこそ、出来るということがいっぱいあるということ、たくさん患者さんから、教えられてきました。

実は私も、二十歳のときに手術をした経験がありまして、三カ月間病院のベッドの上でうんうんとなっていました。その経験が今の活動につながっているのです。そのときに、身体のことはお医者さんや看護師さんは一生懸命診てくれますけれども、私の苦しい心の部分はほんと誰も診てくれないんです。その現実を知ったときに、やはりこの苦しみに対して、関わってくれる人が必要なんじゃないかっていうことで、私の活動は始まっていったのです。

ですから時には、その人にとっては音楽というものがとても癒やしになる、あるいは音や音楽を通じてその人との会話、対話が生まれてくるというケースもたくさんあります。いろんなやり方があり、いろんなツールがあるのです。そのことを最近

は、代替療法とか、補完療法とか、ホリスティックケアというような言い方をしています。私はその中で

仏教とか、宗教の関わりを考えているわけですが、先ほども、先ほどから言っている、この苦しみとか痛みつていうのは、大きく分けると次の四つだと言われているわけです。肉体的な痛み、心理的な痛み、社会的な痛み、そしてスピリチュアルな痛みと。

このスピリチュアルな痛みというのは、なかなか日本語になりにくい言葉でして、元々はキリスト教的な用語の中から「スピリタス」すなわち空気、息、神様の息みたいなところから出発しているもので、どうしても西洋的な考え方のような気がするのです。日本人は元々、このスピリチュアルなものというのとはどんなふうに使ってきたのだろうかということ、を考えることもあります。スピリチュアルという言葉の正式な登場は、一九九八年のWHOの百一回目の理事会のセッションの中で、従来の、身体、心理、社会というカテゴリーだけではなくて、もうひとつそこに「スピリチュアル」という文言をいれようではないかと、そこから始まったわけなんです。これが、心性的とか、霊的とか魂的とか宗教的とか哲学的とかというように、様々な日本語に訳されるのですけれども、ひとつで全部をあらわすということがなかなか出来ないわけなのです。そういう意味で人生の意味とか、その人の生きる存在性の問題、それから信念とか信仰、ピリフとかいうような言い方をすることもあります。そういう考え方があって、最近では言われてきています。これは、皆さんが自分で考えていただきたい。

(次号へつづく)

